



2021

内容見本

はなごよみ

目次

愚想の寄せ集め		名賀月晃嗣		4
國語教科書と歴史的かなづかひ		押井徳馬		10
スクリーンへの手紙		blueday		21
終曲		絲		29
Egodiade		明日楨悠		31
春支度		絲		35
歩みの念 第五章		明日楨悠		36
原稿を書いてみませんか				48

愚想の寄せ集め

名賀月晃嗣

本号のテーマは「正字正かなの実践」。さて何を書かうかと考へたが、「どんな時に？」と問はれたら「個人の責任の範疇では大体いつも」で終了、「どうやつて」との問ひには『みんなのかなづかひ二〇一九』に『仮名遣の使ひ方』と題して書いた文章を読んで欲しいと答へるだらう。書いてからそこまで年月が経つてをらず、似たやうなことを再び書くのは気が進まない。

ここはひとつ何か創作をしようと思つたが、これならいけるといふネタも浮かばぬまま日だけが過ぎた。書けず仕舞で押井編輯長に不義理をすることだけは避けた。否、何でもいから文章が書きたいといふ欲求だけはある。

といふことで、ここから先は、取り留めのないことを思ふままに書き連ねることとする。面白いものになるか、駄

文が出来るかは、筆者にも分からない。氣に入つてくれる人が一人でも現れたなら、望外である。

■コロナと呼ばれるもの

手許の旺文社国語辞典（第八版）で「コロナ」を引くと、天文用語である旨の表記があつて、「太陽の彩層の外側にあるガス層。皆既日食のとき、太陽のまわりから青白く広がって見える。光冠。」とあつた。しかし、本稿を書いてゐる現在、コロナと聞いて真つ先に光冠を聯想する人はさう多くあるまい。ニュースなどでコロナといふ文言が出て来るとき、それはまづ間違ひなくコロナウイルスの一種による感染症を指す。目の前の計算機で試しに「コロナ」をグーグル検索してみたら、見事なまでに感染症についての

國語教科書と歴史的かなづかひ

押井徳馬

現代に於いて傳統的な漢字や假名遣を實踐すると、お決まりのやうに浴びせられる言葉があります。「言葉はコミュニケーションの道具なのに、みんなの読みづらい書き方でわざわざ書くなんて、相手に伝える気がないのでは」。

「學校で習はない舊漢字はともかく、歴史的假名遣は中學の國語で読み方を習つてゐるはずでは」と反論すると、「でもそんなの覚えてゐるはずがない」の返事がお約束。

そこで、現在の中學校で「歴史的假名遣」をどのやうに教へてゐるのか、教科書を調べてみる事にしました。

一) それでも、「櫻」「澤」など人名や組織名等の固有名詞で既にお馴染みのものも多いので、残りは「一般的な文章での使用頻度が高いが、新漢字と字體の大きく異なるもの」を数十字憶えれば、讀む自信が十分附くはずだ。

■實際の教科書を調べてみた

まづは、國語教科書の二大出版社、「教育出版」「光村図書」の現行の中學國語教科書（平成二十八（二〇一六）年使用開始）を實際に入手してみました。

そして、「歴史的假名遣」に關係する解説や、その表記による作品（たゞし、國語改革の前の作品でも、作者・本文とも「現代假名遣い」に直しても表記が一致し、區別の附かないものは除外）がどれだけ掲載されてゐるのか調べてみました。

【教育出版「伝え合う言葉 中学国語1」】

（コラム）四季のたより 春・夏・秋・冬 光孝天皇（君がため）、一茶（草つみや）、從二位家隆（風そよぐ）、

■作品の多さに驚いた

私が中學校で古文の授業を受けたのは昭和時代でしたが、當時と比べると、教科書がA4版と大きくなり、全ページカラーで鮮やかな寫眞や圖が多數掲載されてゐる事に、まづ驚きました。

次に、歴史的假名遣による作品が豫想よりずっと多かったのも驚きでした。きつとA4になつてより多くの内容が載せられるやうになつたお蔭でせう。「枕草子」「徒然草」「おくのほそ道」は昔も今も變らず定番ですが、中學生にとつて既に馴染み深いであらう「小倉百人一首」「竹取物語」を中一の教科書に載せてゐるのを見附けて、これはまさに「我が意を得たり」の氣持でした。歴史的假名遣の作品が「古文」や「文語の詩歌」の章だけに隔離されるのではなく、春夏秋冬にまつはる詩歌のコラムをはじめあちこちのページに散りばめられてゐたのも興味深い點でした。

「歴史的假名遣」平安時代／＼江戸時代の古文」と云ふ印象を持つ人も多いかも知れませんが、詩歌、特に俳句や短歌は明治以降の近・現代の作品も澤山掲載されてゐました。一番興味深かつたのは、「教育出版」の中二教科書にある、高村光太郎「レモン哀歌」。題名にもあるカタカナ語を含め、語彙が現代のものに近い昭和十四（一九三九）年の作品です。「中二病」ではありませんが、愛と死を描いたこの

作風は、きつと中二の思春期の心に大きく響く作品ではないでせうか（勝手な想像）。昭和二十九（一九五四）年生れ、つまり戦後世代の栗木京子も「観覧車回れよ回れ想ひ出は君には一日我には一生」と歴史的假名遣で詠んでゐます。

「光村図書」の教科書では、高村光太郎「冬が来た」「樹下の二人」、山村暮鳥「りんご」、三好達治「大阿蘇」が、口語文でありながら歴史的假名遣のまゝ掲載されてゐます（現代仮名遣い）に直されてゐない！。觀察力の鋭い中學生がその事を發見してくれたら嬉しいです。

「歴史的假名遣」と「現代仮名遣い」で表記の異なる部分には、中二の教科書まで概ねルビ（振假名）がありました。漢字も例外ではなく、まづ歴史的假名遣でルビが振られ、その右に括弧書き（教育出版は青字、光村図書は黒字）で「現代仮名遣い」によるルビが振られる（そして現代語譯は下の段か、黒以外の色で文の左に附く）と云ふ丁寧ぶりです。教育出版「中学国語2」一一〇頁の例を示しますが、色分けで區別しやすくなつたのは、カラー化様々です。

それでも、「どうして私達は語彙も假名遣もまるで異なる

「助けまゐらせんとは存じ候へども、
（ツウエ）
お助け申そうとは存じますが

古文を學ばなければならぬのか」と云ふ疑問を持つ中學生も多いこととせう。その疑問に答へる爲か、「教育出版」も「光村図書」も、私達が古文を學ぶ意義について解説した文章を掲載してゐます。

■誤解を招きかねない解説

このやうに、昔より改善された部分も多いとは云へ、「歴史的假名遣とは何なのか」についての解説は、誤解を招きかねない内容である事が氣になります。

【教育出版「伝え合う言葉 中学国語1」一〇五頁】

ところで、三つの句には、現在の書き表し方と違うところがあることに氣がついたはずだ。このような書き表し方を、歴史的假名遣といひます。

現代の假名遣いとの違いはあつても、それに慣れさえすれば、昔の人たちの生活や笑ひの世界に直接ふれることができます。

【教育出版「伝え合う言葉 中学国語1」一一九頁】

古典の假名遣い

古典の文章で使われている假名遣いを「歴史的假名遣い」といひます。「歴史的假名遣い」と現在の假名遣いと

は異なるので、次のような点に注意が必要です。

【光村図書「国語1」一五七頁】

古典の言葉

古典の文章には、現代の文章と異なる言葉遣いが見られる。時代とともに、日本語も変化してきたのである。

古典語（文語）と現代語（口語）にはどのような違いがあるだろうか。假名遣いの変化や言葉遣いの変化について考えてみよう。

『この歴史的假名遣いで書かれた言葉を、現代假名遣いで書きなさい』とテストに出題すると、少なからぬ生徒がご丁寧に『現代語訳』を書いてくる」と云ふ話を、学校の先生からよく聞きますが、これで原因がわかりました。これも、「昔の文章・現代の文章」と「歴史的假名遣い・現代假名遣い」を混同しかねない説明です。これでは「歴史的假名遣い」と「古典」（光村は「文語」も）を混同したり、「現代假名遣い」と「現代語訳」の違いも分らなくて當然です。歴史的假名遣いで現代口語文を書くとき「なぜ古代人になりきるの」とか「現代の言葉なのにかなが時々古文みたいな中途半端な書き方」と誤解する人が多いのも「さもありなん」。

■補記・私が戦後の國語改革に問題があると思ふ點

- 一、傳統的な漢字と假名遣は「元から有るべくして有つたもの」で、代々繼承すべきものだが、その傳統が破壊された
- 二、それでも傳統的な漢字と假名遣に大きな問題があるなら見直しも必要だらうが、その根據も不十分で、その代りとなる表記も「まともな改善案」ならまだしも、惜しい事に「まともでない理窟に基づく缺陷品」になつてしまつた（下の圖を参照）
- 三、「假名遣（同音の複数の假名の書き分け規則）」の否定が根本原則の國語表記に「現代かなづかい」と名附けたり、「民主的」な改革を標榜しながら實態は「非民主的」（昭和三十六（一九六二）年の國語審議會の「五委員脱退事件」で明かに）と、「看板に偽りあり」
- 四、「漢字も歴史的假名遣も一般國民に使ひこなせる筈がない、無駄な骨折り」と馬鹿にし、民衆に知を蔑み輕視する風潮を廣めた
- 五、國語改革によつて誤解と偏見が廣まつた、傳統的な漢字と假名遣は名譽恢復されてをらず、從來の表記も建前としては「自由」なのに、實態としては差別待遇を受ける事が多く、「表現の萎縮」を招いてゐる
- 六、傳統を破壊する改革の惡しき前例を作つた

正しい原理原則に 基づく國語への回歸を

現代仮名遣い
もど+つゝ=もどく
じめ+ん=じめん
ふ+ん=ふん

常用漢字
佛↓仏
拂↓払
沸↓汰

漢字制限
時+小學一年で學ぶ
書+小學二年で學ぶ
目+書いちゃ駄目

こんな國語、
をかしい！



「#あへ」に語

スクリーンへの手紙

— HF第三章とか劇場版ヴァイオレット・エヴァーガーデンとか —

文：bluesday

■はじめに

今年も『みんなのかなづかひ』略して『みんな』の季節がやって参りました。と、初っ端からまづもつて問題なのは、これを書いてゐるのが原稿の一次締切である九月を一ヶ月も過ぎ十月もいよいよ半ばにならうかといふ時期である、といふ所なんです、それはまあいつもの事なので気にしない事にしませう（万死に値する）。

本誌では毎号テーマが設定され、基本はそれに即した原稿が募集・掲載されます。勿論それ以外の内容でも、最低限正かなの文章であれば概ね掲載OKといふ「ゆるい」編集方針ですので、私みたいな言語に造詣の深いとはとても言へないド素人でも正かなを使へさへすれば、さうして何かそれらしい文章を書きさへすれば、大体は載せて貰へる

訳です。それに甘えて毎号毎号、テーマとは何ぞやそれはうまいのか、と言はんばかりにテキストに好き勝手書いて、拳句の果てに締切も平気でぶつちして送り付けるといふ傍若無人、といふのが例年の所行でありました（万死に値する）。

しかして今号のテーマは……「正字正かなの實踐」。うん？ これはつまり、私がかうして毎号毎号「正かなを使つて文章を書く」といふ行為そのものではないですか？ つまり何を書いてもOK？ やつたね青ちゃん今年はテーマに沿つた文章を書けるよ心中言ひ訳しながら書かずに済むよ！ といふ解釈で、例年の如く自由にやらせて頂きますので、読者諸賢に於いては悪しからずご了承頂きたく（万死に値する）。

といふ訳で今年は何を書かうかな、といふのが毎度お馴染みの悩み事なのですが、昨年に引き続き、映画の感想でも書いてみようかなと思ひます。スクリーンに紡がれる物語を受け止め、咀嚼・消化吸収し、さうして心の栄養として行き渡つた果てにはわりと浮かんだ、形の定かならぬ、しかしそれは感情を揺さぶり、思案させ、はたまた暖めてくれる、そんな何か。その輪郭をもう少し明確にすべく、さうしてそれを読者諸賢に伝へんとすべく、己の内にある自動手記人形に代筆を依頼する試みです。

……うんまあさうですね、こんな表現をしてゐる所からして『劇場版ヴァイオレット・エヴァーガーデン』の感想を書かうとしてゐるのが、あからさまですね……ええまあ、とてもとても良かったので……（語彙力）。あ、あとそれと『劇場版 Fate/stay night [Heaven's Feel]（以下HF）第三章』についても書かせて頂ければ……これもとてもとても楽しみにしてゐたので……（語彙力）。

■やはり映画館はいい

昨年、都合三十三回にわたつて劇場に足を運び、発狂スレスレの所で感想文を絞り出してみんなに寄稿した映画『冴えない彼女の育てかた Fine』ですが、円盤がついに先日やうやく発売になつたので喜び勇んで購入して鑑賞致し

ました。大変ビクンビクンしました。したんですよ。したんですけども……やはりあの、劇場といふ非日常空間での大スクリーン大音響の迫力ある鑑賞体験を想起するに、自宅ではどうしても物足りなさが出てくるのです。

冴えカノ Fine の後には新型コロナウィルスの流行により、映画館の営業は軒並み自粛となり、楽しみにしてゐた作品も公開延期となり……といふ状況は、地味ではあつてもなかなか辛いものでありました。それを乗り越えての令和二年八月十五日、HF第三章公開。三部作の完結編であり、『Fate/stay night』といふ物語の根幹が明かされるグランドフィナーレでもある本作、多くの人々の期待に違はぬ素晴らしい出来でした。さうして思つたんですね。こんな素晴らしい作品を劇場で観られる、全身で体感出来るといふのは、なんとも幸せな事であるなあと。

その思ひは、劇場版ヴァイオレット・エヴァーガーデンを観た時も同じでした。いや、更に上回つたとすら言へます。静と動、細やかさと大胆さとで観客に確かな「体験」を与へるのが映画館であり劇場作品なのだな、と改めて認識した所です。いやまあ、さういふ映画館や作品ばかりではないのかも知れませんが、さうして今やホームシアターでも到達出来る高みなのかも知れませんが、それでもまだまだ、映画館の強みは如何様にも發揮出来るのではないか

Egodiade (一幕一場)

文：明日楨悠

これから始まる劇の前座に興ぜられる茶番の趣向。

登場人物

王

妖精

その他の家来たち 役者たち。

王の侍従役。

(中央の玉座に王。妖精登場)

妖精 王さま、王さま、本日は演劇祭でございます。

王 喜ばしきことぢや。

妖精 役者たちが来てをります。お呼びませう。

(その他の家来たち入場)

王 おお、お前たち。兵士よ、大臣よ、メイドよ、コ

妖精

ツクよ、そのなりはどうした。

この度は王さまの家臣一同、一日限りの役者と相成りまして、稽古を積みました精一杯の劇をお目にかけてませう。そして、妖精役を努めますのが、

この私――

(食ひ込んで) わしぢやな。

いいえ。

妖精

王 (間)

王

「飢ゑた獅子めの唸る頃、／月に狼の吠えるころ、／どえらい為事にくたびれて／眠い農夫は軒かく、
ひやへしやつ

／消えさうな篝の燃木が光り、／キヤァキヤァ梟がキヤァキヤァ啼いて、／枕の拳らぬ不幸な患者に／死装束をば思ひ出させる。／今こそ墓所が皆

口開いて、／お堂の方へと幽霊どもが／揃つてぞ

歩みの念

文：明日楨悠

五

ぼーんと火花が上がる。

「たーまやー」

井戸の水も明るくなる。

「かーぎやー」

子供たちが川辺をはしやぎ回る。

西瓜番の若彦は余所の軒端から天を見上げてゐる。

千禰は団扇を片手に柳の木蔭でかかんでゐる。

緩りとうごく団扇には大きく「祭」と書かれてある。さ

う、今宵は祭りだ。

川の淵を見下ろして子供たちが騒ぎはじめる。

灯籠が流れてきたのだ。

煌々と照り映える幾百もの灯りが、お堀の下を占めてゐる。

子供たちは熱に浮かされたやうに石垣から身をのりだして、灯籠の列が通り過ぎてゆくのをしげしげと眺めた。

人の声が遠のいて、空に浮いてゐるやう。

「おい、西瓜が冷えたぞお」

あらかた川が静まってから、若彦が呼んだ。

子供たちが群がってきて、井戸水に浸かった西瓜を釣瓶で引き上げる。

「これって山越えに出す山車？」

切り分けてもらった西瓜を囓る少年のひとり、井戸端

の御輿に目を留めて尋ねてきた。

「どうかな」

千禰ははぐらかした。

山越えといふのはこの町の祭りの風習である。この時季になると、町人たちは集つてめいめいの山車を拵へる。出来たものを祭りの夜に閑所跡へ持つていく。閑を通つた猛者たちは、夜つびでかげらぬ松明を手に、山車を引いて坂道をかけあがり、一山越した隣町まで奉納しに行くのだ。

「いいぢやないか。山越えしようよ」と若彦。

この祭儀を知ったときに、千禰がはつきり興味を示したのを彼は見て取つてゐた。況や参加すれば一石二鳥であつた。山を越せば旅が捗る。授かりものを御輿に献ずるといふ目的にも適ふ。

それでも千禰が躊躇ふのは、余所者がさう簡単に雜じつていいものかとの遠慮、その他諸々の不安なのであらう。彼女の野心を若彦は後押したかつた。

「でもねえ、この御輿は私たちがつくつたわけぢやないでせう」

「それはないぜ。ぶつ倒れた鳥居の柱を千禰ちゃんが取つ手にしようつたんだろ」

若彦はびしやりと御輿の轆をたたいた。千禰が笑ひこける。

「そんなこともあつたわね。あの無礼な閑取、いまはどうしてゐるかしら」

「どうだつていいよ、あんな奴。それより山越えだよ。ど

うなんだい」

「うーん、急がなくなつても明日になれば通れるから……」
山の方角に目をやる。

「でも氣になるんだろ？」
こくりと頷いた。

「ぢや、決まりだ。これを平らげたら出発だ」

言ふや若彦は西瓜にかぶりつき、種をぷっぷつと吹く。
子供たちがげらげら笑ふ。

二人は御輿を担いで閑所跡へと向かつた。

山車を控へた黒山の人だかりが列をなしてゐる。大人が数十人で力を合せないと持ち上がらないやうな、どえらく派手でごつつい山車ばかりだ。男女一組が片手で担げる御輿とは大違ひである。

山車の列を束ねて門衛が立ちはだかつてゐた。

武蔵坊弁慶を思はせる巨漢が、ぢつと周囲に睨みを利かせてゐる。

金壺眼で射竦めた先頭集団に告げる。

「うむ、お前等は通つてよし！」

閑の声を上げて先頭の山車が動き出した。門衛が可否の判断をするらしい。

「次」

ときどきしながら待ち、いよいよ次の番まで来た。二人の目の前にある山車は、随分と判断に時間がかかつてゐる。今までのものに比べると古さが目立つが、大きさは申し分ない。

首をひねって思案してゐた門番が手を打った。

「華がない！ 装飾を足して出直して参れ」

禿頭の親爺たちは骨董を引いてすすごと退散した。

御輿を引いた若彦と千禰が前に出ると、門衛は一同を睥睨してぷつと吹き出した。

「わはははは。何だこれは。えらう小ぶりの屋台ぢやなう」

関所が爆笑に包まれる。

「古くも小さくもありません。自慢の山車ですよ」

「さうかさうか。ちびっ子が引いてきたのなら頼れる大人を連れてこいと云ふとこだが、あんたらと来たら、なんだな、仕様もないいたづらはやめると云ひたい」

門番のぱりとした口髭が憎々しく上向いてゐた。

「いたづらですって。これで本気の旅をしてきたのよ」

「偉さうに仕分けやがって。いいから黙って山へ通せばいいんだい」

憤った二人が食つてかかると、相手はますます胸を反らして大得意だ。

「いいかね。こっちにも面子といふものがあるんだよ。貴様ら、天下の山越えをただの祭りの催しとでも思うたか。これは年に一度、山を越した隣町にこちらとの力の差を知らしめるための行事なのだ。わが町の威信にかけても目覚ましい出来栄えでないと意味がない！」

「些とも粹ぢやないね」若彦は吐き捨てた。「空威張りすればするほどお粗末な器に見えら。下らない御託を並べる位ならさっさと通せやい」

「明日を待つんだな。出店なんかもいろいろあつて楽しいぞ。何だらう、かうすればいいと解つたら助言してやるんだが、こいつは難しいな。わしにも理由は解らんが、どことなう氣に触るのだなあ」

ふいとそっぽを向いて、御輿は関所を離れる。こんな分らず屋は見限るしかない。

後ろから門衛が太い声を投げかけた。

「さうさう！ 祭りを楽しむなら本場所を觀に行つてくれ。

わしの倅が土俵に上がるんだ。聞かがいい、その名は横綱跋天偶なり」

門前から歓声が上がる。苦虫を噛み潰したやうな顔で若彦と千禰は大通りまで引き返した。

「どうする。相撲観る？」

原稿を書いてみませんか

中

国語の表記に、中国本土とシンガポールでは使はれる「簡体字」と、台湾や香港では使はれる「繁体字」があるのと同様、日本語の表記にも漢字と仮名についてそれぞれ二種類あります。「正漢字」（いはゆる「旧漢字」）と「新漢字」、「正仮名遣」（いはゆる「旧仮名遣」、「歴史的仮名遣」と「新仮名遣」（「現代仮名遣い」のこと）です。

「正漢字」や「正仮名遣」は、絶滅した国語表記ではありません。過去文献の引用、短歌や俳句をはじめとした芸術において、現代でも細々と使はれてゐます。

現代において、「正漢字」「正仮名遣」を読んだり書いたりする方には、様々な立場の方がいらつしやいます。

- ・過去文献の引用に限り正字や正かなで書きたい
- ・短歌や俳句に限り正かなで書きたい

- ・ブログや芸術作品等を正字や正かなで書きたい

- ・今のところ書く事はしないが、正字や正かなで読みたい

本誌は、そんな皆さんを応援する為に、「全頁歴史的仮名遣（固有名詞や引用文は除く。また、漢字は正漢字を歓迎するが新漢字も可）の同人誌」として毎年発行してゐます。

原稿募集のお知らせ

「正漢字」「正仮名遣」は、読むだけでも十分楽しめますが、実際に書いてみると更に楽しめますし、学ぶ近道でもあります。皆さんも試してみませんか。

『「正字正かな」で原稿を書いても印刷を断られたり、『新字新かな』に直されたりする』のが残念ながら当り前の現

在、本誌は『正漢字』『正仮名遣』の原稿がそのまま掲載される」のが「当り前」の、謂はば「解放区」です！

募集内容

- ・ 毎号のテーマに基づく随筆や論攷等（テーマ投稿）
- ・ 漢字や歴史的仮名遣について、国語国字問題について
- ・ コンピュータで正漢字や歴史的仮名遣を使ふテクニク
- ・ 歴史的仮名遣による詩歌、小説、随筆、漫画等の作品
- ・ 半ページ〜四分の一ページ程度の短いコラム

国語問題に関する記事が多く集まる本誌ですが、テーマや国語問題に関係しない記事もむしろ歓迎いたしますので、お気軽にお書きください。

毎年秋発行、次号×切は、二〇二一年十月頃を予定してゐます。次号のテーマはウェブサイトで発表予定です。

なほ、執筆者や校正・組版等の作業を手伝ってくださった方には、完成した冊子を一冊無料進呈致します。

投稿方法

本誌への投稿には、グループへの入会や会費のお支払い

は必要ありません（逆に、原稿料もお出しできません）。ただし、スムーズな聯絡^{れんらく}の為に、原則として電子メールアドレスをお持ちの方に限定致します。「はなごみ」のメールアドレスまで、ご遠慮なくメールでお問合せください。原稿も、メール本文に書いていただくか、メールにファイルを添付してお送りください。なほ、記事に関するご確認のため、編輯・校正・組版担当者にメールアドレスをお伝へ致しますので、あらかじめご諒承ください。

また、スムーズな編輯・校正の為、以下の情報もメールでお知らせください。

①ペンネーム

- ②掲載ご希望の方はTwitter IDや電子メールアドレス（読者からの聯絡先として、なるべくご記入ください）
- ③ジャンル（解説、評論、小説、詩歌、随筆、漫画等）
- ④内容（国語教育に関するエッセイ、学園もの小説等）
- ⑤未完成の場合は予定文字数（文字数か原稿用紙換算）
- ⑥漢字、仮名遣

（正字正かな・新字正かな・広辞苑前文方式・新字新かな）

正字正かな 「櫻色のバッグを持つてゐる」

新字正かな 「桜色のバッグを持つてゐる」

広辞苑前文方式 「桜色のバッグを持つて居る」

新字新かな

「桜色のバッグを持っている」

↓ 「桜色のバッグを持つてゐる」

に直して印刷

(ご希望により新字正かなではなく正字正かなにも直せます)

⑦捨て仮名(ひらがなカタカナとも使ふ・カタカナのみ使ふ「推奨」・使はない)

ひらがなカタカナとも 「桜色のバッグを持つてゐる」

カタカナのみ使ふ 「桜色のバッグを持つてゐる」

使はない 「桜色のバッグを持つてゐる」

一) 新字正かな兼新字新かなの事。ひらがな・カタカナとも捨て仮名使用推奨。言葉選びの難易度が高いので、歴史的仮名遣に十分慣れた人向けです。

二) 小さい「や」「ゆ」「よ」「う」の事。

ファイル形式

文章は原則としてテキストファイルでお送りくださるか、メール本文にそのまま書きください。ワードや一太郎等ワープロソフトのファイルでも構いませんが、文章校正機能を使用可能なワードまたはLibreOfficeを推奨します。

くの字点(ゝ・ゞ)は「／」「／」で代用しても構いません。「正字正かな」をご希望の方は、コンピュータの一般的な文字コードに無い文字(二点之繞や「示」の形の示偏の漢字等)は新字で代用するか、注意書きを附加してください。編輯時に、フォントに字形のある範囲で、印刷用の正しい字形に直します。

写真やイラストや図ですが、残念ながらカラーは出ません(口絵を除く)。画像ファイルは、原則として文章とは別にお送りください(ワードで位置決めした内容をそのまま使ふのではなく、こちらで組版ソフトを使つて組み直すので、元ファイルが必要です)。また、可能な範囲で、縮小されてゐない、なるべく大きなサイズをご用意ください。なほ、本誌のサイズはA5版です。詳しくはメールでお問合せください。

著作権について

皆様の原稿は、「同人誌(紙版および電子書籍版)」の原稿として「および」必要に応じ、同人誌頒布の際の内容見本として「使用しますが、作者に許可をいただかない限りは、それ以外の目的(他の本の原稿に転用する等)」では使用しません。

また、前述の目的に限って、皆様の原稿を使はせていただきますが、原稿の著作権そのものを譲渡していただくといふ意味ではありません。後でご自分の原稿を（ウェブサイトに載せたり個人誌・同人誌・商業誌に載せる等）どう活用していただくかは、お任せします。

それでは、皆さんの作品を心よりお待ちしております。



本の DIY で……更に表現の自由！

従来は……



~~正漢字・
歴史的
かなづかひ~~

→
修正

新漢字・
現代
仮名遣い

で書くのは
自由 でも

に直して
出版します

これからは……



正漢字・
歴史的
かなづかひ
(本誌はこちらが原則)

新漢字・
現代
仮名遣い

どちらもパソコンで自己出版